

優しさがあふれる世界を願って

(原文はドイツ語)

ポール・コマリー (8 歳)

イタリア<オーストリア・ウィーン市在住>

人に優しくするのは簡単なことではありません。僕のまわりには、顔をしかめていそいそどこかに向かっている人たちがばかりに思えることがあります。僕は大きな町に住んでいて、だれもがいそがしそいで、自分たちのことでせいっぱいです。都会にはふきげんな人たちがいます。何かにつけて文句をいっています。暑すぎる、寒すぎる、道が汚い、空気が汚れている、毎日の生活が辛いなど。こういう人たちは、生活が辛ければ人に優しくするのもむずかしいと思っています。僕はまだ 8 歳ですが、この人たちのいうことは理解できます。

小学校に入ったとき、同じクラスの子がからだの大きい上級生二人にいじめられていました。僕はその子を助けるために「そんなことやめろ」といいました。いじめていた上級生の一人が僕の顔につかみかかろうとしたので、僕のメガネがはずれて床にころがりました。メガネはこわれてしまいました。上級生はいじめのをやめました。両親にはだまっていたのですが、結局気づかれてしまいました。あとになって、いじめっ子はよく家庭で問題がたくさんある子たちだと聞きました。

人への優しさは家庭からはじまると思います。社会を変えたいのなら、まず自分たち自身を変えていかなければいけません。大きなことは小さなことからはじまります。そのための一歩は家庭からはじまります。僕は両親からいつも、人に優しくし、人の役に立つようにいわれています。しかし人に優しくするときは、よく注意して限度を守るようにと。僕の両親はその手本を示してくれようとしていますが、僕自身のやり方でやってみようと思うこともあります。

ある晩、僕は、母が部屋でこっそり泣いているのを見ました。父が頭の手術をするので、それが悲しくて不安だったからです。僕は自分にできることはあまりないことはわかっていたのですが、母に水をもって行き、母が落ち着くまで何度も抱きしめました。家での手伝いをもっとして、妹のめんどうを見ると約束しました。やがて母は私に笑顔を見せてくれたので、僕には母が安心したことがわかりました。

こうして僕は、家での手伝いをもっとするようになりました。そうじ、庭の花の水やり、スーパーでの買い物、妹の世話。これは優しさだと思います。学校では、おかしやサンドイッチを友だちとわけ合い、放課後の勉強時間に早く宿題が終わったときは、算数や他の科目を教えてあげるなどして、ほかの子たちを助けてあげます。これは優しさだと思います。

前回の復活祭ではエッグハントに参加しました。僕は卵を二つ見つけましたが、一つも見つけられ

なかった女の子が泣いていたので、僕の卵を一つわけてあげました。地下鉄とバスの中で、お年よりと妊婦さんに席をゆずってあげました。これは優しさだと思います。

ショッピングセンターの床にムシを見つけたときは、だれかにふまれないように茂みまで持って行き、そこにおいてやりました。家でクモを見つけたときもそうします。庭にやってきた鳥にはエサをあげます。これは優しさだと思います。

僕は祖父にピアノをひいてあげます。とても年をとっていて病気ですが、祖父にはしあわせでいてほしいのです。僕は祖父にいいました。祖父や祖母、両親、妹、そのほかたくさんの人たちの世話をし、あげられるようにお医者さんになりたい、と。祖父はほほ笑んで、僕にもう一度ピアノをひいてほしいといいました。

人に優しくするのは簡単なことではないという人もいます。そのとおりかもしれませんが、そうでないかもしれません。でも、大切なことは、たとえつらいことがあっても、家や学校、ふだんの生活のなかで自分なりの優しさを行動にうつしてみることです。そうすれば、僕たちの社会がより良くなって、優しさがあふれるより良い世界で、みながより良い人間になれると思います。